

平成 25 年度大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	24J03	氏 名	竹川 優子
研究主題 —副主題—	小 1 問題における健康教育的視点からのアプローチの有用性		
所属校	多摩市立東落合小学校	派遣先	東京学芸大学大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	この研究は、小 1 問題予防のための適応指導において、心と体の健康教育的視点を取り入れた適応指導プログラムを開発し、その有用性を検証することを目的とする。そのため次の二つの研究を実施する。 研究 I 小 1 問題の実態を広く捉える中で、入学後に学校生活適応のために必要だと考えられる指導内容について明らかにするとともに、心と体の健康教育の視点を取り入れた適応指導プログラムを開発する。 研究 II 健康教育的視点を取り入れた適応指導プログラムを実施し、その有用性を検証する。 この研究 I、研究 II によって、小 1 問題の予防策を、入学後の適応指導を工夫改善する観点から考え、健康教育的視点を取り入れたプログラムの効果を明らかにすることで、今後の有効な小 1 問題の予防策開発の一助とする。
II 研究の方法	研究 I 小 1 問題の実態を広く捉えるため、1 年生担任経験者の視点だけでなく、就学時健康診断から 1 年生児童との関わりも多く、客観性をもって学級を見ることができる立場にいる養護教諭や、巡回相談や就学相談等で 1 年生学級を多く観察している教育センター職員の視点も合わせて調査を実施することとした。平成 24 年 6 月から 8 月までに都内公立小学校養護教諭 7 名と都内公立小学校 1 年生担任経験教諭 11 名、教育センター職員 1 名を対象に半構造化インタビュー形式を用いてインタビュー調査を実施した。その結果をカテゴリー分類し、適応指導プログラムを開発した。

	研究Ⅱ 東京都内公立小学校２校の１年生児童において、介入群（３学級）と対照群（２学級）を設定し、プログラムを実施し検証を行った。 A 小学校 介入群 （１学級 男子 17 名 女子 18 名 計 35 名） 対照群 （１学級 男子 16 名 女子 18 名 計 34 名） B 小学校 介入群 （２学級 男子 30 名 女子 28 名 計 58 名） 対照群 （１学級 男子 16 名 女子 13 名 計 29 名） 介入群、対照群の担任それぞれに説明をし、担任自身が学級で 7 回の適応指導プログラムを実施した。一方対照群では、同時に市内で配布されているソーシャルスキルブックを使用し学校生活への適応指導に当たった。児童の自己評価として、事前、事後、追跡の 3 回自記式質問紙調査を実施した。また教師評価として、児童の評価と同時期に学級内での児童の様子を観察し、問題行動 10 項目について該当する児童にチェックを入れる形で実施した。 ＜ 7 回のプログラム内容＞ <table border="1"> <tr><td>1 回</td><td>姿勢に気を付けよう</td></tr> <tr><td>2 回</td><td>大切な睡眠</td></tr> <tr><td>3 回</td><td>朝から元気に過ごすには</td></tr> <tr><td>4 回</td><td>困った時どうする？</td></tr> <tr><td>5 回</td><td>トイレは大切な場所</td></tr> <tr><td>6 回</td><td>フワフワ言葉とチクチク言葉</td></tr> <tr><td>7 回</td><td>イライラした時どうする？</td></tr> </table>	1 回	姿勢に気を付けよう	2 回	大切な睡眠	3 回	朝から元気に過ごすには	4 回	困った時どうする？	5 回	トイレは大切な場所	6 回	フワフワ言葉とチクチク言葉	7 回	イライラした時どうする？
1 回	姿勢に気を付けよう														
2 回	大切な睡眠														
3 回	朝から元気に過ごすには														
4 回	困った時どうする？														
5 回	トイレは大切な場所														
6 回	フワフワ言葉とチクチク言葉														
7 回	イライラした時どうする？														
Ⅲ 研究の結果	研究Ⅰ インタビュー結果によって抽出された言語を、指導内容を構成する上で必要であると思われるものにしぼりカテゴリー分類を行った結果、①基本的生活習慣②感情のコントロール③人との関わり④生活スキルという四つのカテゴリーとなった。これらを更に①を「身体管理」②、③を「心の安定」④を「生活管理」と三つの大きな単元として分け、インタビュー調査の「落ち着いた学校生活を送るために必要だと思われる指導」において要望が高かった内容を優先的に取り上げ、具体的な指導内容を設定した。その結果「身体管理」の単元では「睡眠時間」、「姿勢」、「トイレの使い方」について、「心の安定」では「ストレスマネジメント」や「相互理解のための言葉（フワフワ言葉とチクチク言葉）」について、「生活管理」では「気持ちのよい 1 日のスタート」や「困った時の伝え方」について、をプログラムの構成内容とした。また一般的なソーシャルスキルトレーニング（SST）の流れである、「教示」、「モデリング」、「リハーサル」、「フィードバック」の 4 ステップの中で、主として「教示」と「リハーサル」の部分に、心と体の健康を意識した内容を取り入れていく構成とした。														

	研究Ⅱ プログラム全てを受講した 150 名を対象に分析を行った。児童質問紙調査 12 項目のうち「身体管理」、「心の安定」、「生活管理」の内容に含まれる 11 項目を分析の対象とし、「よく当てはまる」4、「少し当てはまる」3、「あまり当てはまらない」2、「当てはまらない」1、合計 44 を満点とした調査では、介入群、対照群合わせた全体の平均値は 38.2 であった。そのため 39 以下を下位グループとし、下位グループの児童質問紙調査 11 項目を「身体管理」、「心の安定」、「生活管理」それぞれの項目ごとに、群（介入群、対照群）と時間（事前、事後、追跡）を要因とする 2 元配置分散分析を行った。その結果、3 回の測定間における変化（時間）は「身体管理」、「心の安定」、「生活管理」全てにおいて有意な交互作用が認められた。（$F(2, 100) = 3.367, p < 0.05$）。「心の安定」、「生活管理」は有意な交互作用は見られなかったが、対照群では「身体管理」は事前（8.6）から事後（10.0）へ得点上がるものの、追跡（9.1）では下がるのに対し、介入群は事前（9.9）から事後（10.1）、追跡（10.2）へと下がり得点を上げる傾向が見られた。また、「身体管理」における介入群の下位グループにおいて、多重比較（ボンフェローニの方法）を行ったところ、事前と追跡の間に有意な差が見られた。 教師評価では、児童調査と同時期の計 3 回、児童を観察し 10 項目において、「問題がある」と思われる児童についてチェックを入れる形で行った。事前、事後、追跡の三つの段階において χ^2 検定を用いて介入群、対照群と、問題「あり」「なし」との関係を調べたところ、事前、事後においては介入群が有意に高かったが、追跡では介入群、対照群の差が縮まる結果となり有意な差は見られなかった。
Ⅳ 考察	介入群、対照群の下位グループにおいて、事前、事後、追跡の時間的な関係を見ると、「身体管理」の項目において有意な交互作用が見られた。また、「心の安定」、「生活管理」の項目でも、有意ではないが、対照群は事前から事後へ一度得点は上がるものの、追跡では下がる傾向があるのに対して、介入群では、事前、事後、追跡と一度も下がらずに得点上がる傾向があった。このことにより、第 1 学年の適応指導において、健康教育的視点を取り入れた本プログラムが、一般的な適応指導プログラムに比べ一定の成果を出すことができたと言える。また、教師評価においては、事前と事後では介入群の方が有意に高かったものが、追跡では有意に高いと言えない値になったことで、もともと介入群に「問題あり」と指摘された児童が多かったものが、時間の経過とともに減少し対照群との差が縮まったことを意味している。このことから、本プログラムの教育効果により、介入群が対照群に比べその問題性が改善されたことを示唆していると言える。